

回天特別攻撃隊として南海に散った兄 西尾ふき子

はじめに 戦争展実行委員会委員会より

西尾ふき子さんのお兄さんは成瀬謙治さんです。お兄さんの紹介をします。

海軍兵学校在学中に成瀬謙治は「愛知一中予科練総決起事件」に後輩思っって勇氣ある行動をしました。

愛知一中(現県立旭丘高校)予科練総決起事件とは

昭和18年(1943年)7月5日



昭和18年7月6日、朝日新聞(地方版)が大見出しで「愛知一中の快挙 全四、五年生 空へ志願」と報じた。海軍は各戦線で劣勢となり、大量の飛行搭乗員が必要となった。その為、昭和18年、海軍当局は文部省を通じ各地の中等学校に予科練志願の割り当てを指示した。

しかし、愛知一中は割り当て47名に 志願者13名

そこで、7月5日第1・2時限、3年生以上の生徒700余名を柔道道場に集め、時局講演会を開き、校長や配属将校が志願を強く促した。

「天皇陛下のおんため国家のため、愛知一中のため、諸君の奮起を期待する」
3・4時限 各クラスで話し合いの後、再び柔道場に集り、意見発表会を開く。「陛下のおんため、この短い人生を灼熱の炎となっていきたいのです」

「天皇陛下のために死ぬことは、永遠に生きることです。」

誰かが叫んだ。「征くものは立て」→全員起立(一名の目の悪い生徒をのぞいた4年生以上と3年生の有資格者)

<以上参考図書 「積乱雲の彼方へ 愛知一中予科練総決起事件の記録」江藤千秋

1981年 中央大学出版局 江藤氏は当時3年生として在学中 事件の渦中にいた>

当時の新聞報道

*7月6日 朝日新聞(全国版 見出し)

4・5年生が挙って(こぞって)空へ 空の決戦場へ 愛知一中の生徒大会

記事文中より

野山校長談「(前略)生徒も泣いた私も泣きました。アメリカの生徒に負けてたまるかとい気概で全く学園は火の玉です。(後略)」

5年生生徒会長長久田〇〇君談「高校その他への進学希望者も全部残らず夢をすててただ大空の決戦場へ行く決議をしました。一部には家庭の事情などもありませうが、あくまでも押切って行こうと固い決意をしています。

決して一時的軽挙ではありません。」

*7月7日 中日新聞(見出し)

征け空へ 励ます 父兄 愛知一中進む(ほとぼしる)闘魂

新聞を見て成瀬謙治は、海軍兵学校に在学中だった一中出身者を代表して校長に手紙を送った。(謙治 19 才) 海軍兵学校入学当時の成瀬謙治



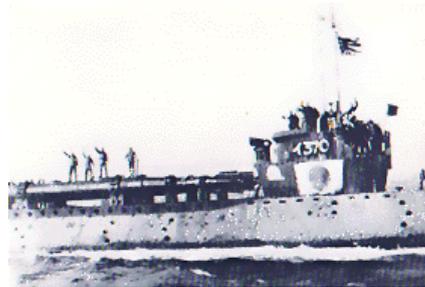
「一中全校生徒を予科練へ志願させることは、無意味であります。生徒ひとりひとりの能力は、それぞれ異なります。能力に応じた道へ進ませてください。それでこそ本当に国に報いることとなります。この戦争で死ぬのは、わたしたちだけで十分なのです。」

成瀬謙治の略歴 終戦4日前 回天とともに21歳で戦死

年.月.日	謙治略歴	出来事
1924 (大正12).11.4	旧小原村川見 (センミ) で成瀬末吉の長男として誕生	
1938 (昭和13).3	(小学校入学前に藤岡に引っ越す) 藤岡尋常高等小学校卒業	
1938 (昭和13).4	愛知一中に進学 (66回生)	
1941 (昭和16).12.1	海軍兵学校入学	12.8 真珠湾攻撃
1943 (昭和18).7.5.		7.5 愛知一中総決起事件
1944 (昭和19).3.22	海軍兵学校卒業 (73期)	8月 人間魚雷を兵器として採用「回天」と命名
1945 (昭和20)8.11	回天特別攻撃隊多聞隊長として戦死 (享年21才)	8月15日 終戦



全長約15m 直径1m
(中では兵士は立てない)



光基地を出撃する回天特攻隊
(回天は潜水船の甲板に取りつけられている)



愛知一中時代の謙治

兵器「回天」「人間魚雷」は、もともと人が乗るものではなかった魚雷を改造したもの。愛知時計が製造し、呉の海軍工廠で改造し使用した。搭乗員自ら操縦の一人乗りの兵器。操縦は非常に複雑で困難。搭乗員はすべて志願によった。年齢は17歳から高齢者で27歳、大多数は20歳前後の若者だった。戦死者は106名。なお回天作戦に参加して未帰還の潜水艦8艘、その乗組員は810名。

回天特別攻撃隊として南海に散った兄

西尾（旧姓成瀬）ふき子（67）

戦後五十年、老いて一人身となりました私は、今年長年荒らしてしまった田に向かい、久しぶりに米作りに汗したのでございます。

たわわに稔った稲田を眺めていますと、貧しくとも温かかった子どものころのわが家を懐かしく想い出すのでございます。父母と長兄、次兄に弟、そして私。いろりの火に赤々と写し出される当時の顔が順次に浮かび上がるのでございます。

五つ年上の長兄謙治は、とりわけ気が優しく、家の手伝いはもちろんのこと、私の勉強をみてくれたり、お習字のお手本を書いてくれたり、妹の私を本当に可愛がってくれたものでございます。

その兄が県立一中（旭丘高校）を卒業したのは、太平洋戦争が勃発した年でございます。運命とは、皮肉なものでございます。時あたかも戦雲急を告げ、兄も医師志望の初志を捨て、海軍兵学校へ、自ら進んで入校したのでございます。

兄の海軍兵学校時代のことでございます。朝日新聞が『愛知一中の快挙＝全四、五年空へ志願』の大見出しで、一中生徒の愛国心と勇気を絶賛し、全国に報じたのでございます。このことを知った兄はすぐ一中出身者を集め話し合い、母校の後輩の時勢に流される一途な考えを再考させようと、兄が代表で一中の校長先生に手紙を送ったのでございます。

『一中全校生徒を予科練（少年飛行兵）へ志願させることは、無意味であります。生徒ひとりひとりの能力は、それぞれ異なります。能力に応じた道へ進ませて下さい。

それでこそ、本当に国に報いることとなります。この戦争で死ぬのは、わたしたちだけで十分なのです。』と、このような内容であったそうでございます。

国中が異常な感覚になってしまう戦時下で、兄は、時の風潮にも正対できた真に勇気のある人でもあったと思うのでございます。

兄が中尉に昇進したころには、すでに戦況は日増しに悪化し、戦局挽回のため、海軍では、回天特別攻撃隊が創設されたのでございます。兄も隊長として、お国のため、その作戦の渦中の人となっていったのでございます。

そのころ、兄はすでに死を覚悟していたのでございましょうが、私どもと、たまに会うことはあっても、そのことに関する話には一切ふれたことがございません。

兄は、次の辞世の句を残して、ついに出撃したのでございます。

国思う若き命よ若桜 今ぞ雄々しく南海に散らん

大君の御陵威かしこみ微笑みて 今ぞ散るらん若桜花

兄の出撃、最後のようすを私どもは知るよすがもございません。ただ、毎日新聞編『人間魚雷回天特別攻撃隊員の手記』によれば、次のように記されているのでございます。

『時岡隆美大尉指揮の伊号三六六潜水艦は、八月一日に光基地から沖縄東南海面に出撃した。

八月十一日、北緯十五度、東経一三五度、パラオの北方五〇〇カイリ、ウルシーと沖縄を結ぶ線の海底に潜航して機を伺っていた。

この日も敵艦に会うこともなく暮れようとしていた。時岡艦長は浮上を命じ、回天隊長成瀬謙治中尉と二人、艦橋で煙草をすいながら水平線に目をやっていた。

五時三十分、前方見張員が水平線のかなたに林立するマストを発見した。ウルシーから沖縄に向かう大輸送船団である。

「総員配置につけ。」

「魚雷船用意、回天戦用意。」

「潜航用意。」

「両舷停止、潜航急げ。」

回天の発進準備が進められた。二基は縦舵機不調で発進できず、成瀬中尉、佐野一飛曹の搭乗する三基が突進していった。三十分が経過、遠い海で突然起きた爆発音が海水の層をふるわせて伝わってきた。二発目も、三発目も。若い命は回天とともに、目標にぶつかったのである。』…合 掌…

その時、兄は弱冠二十一才……二階級特進……海軍少佐……勲五等旭日章……功三級金鷄勲章……軍神。

しかし兄の姿は、もはやこの世にございません。

そのむなしさは、なににもたとえようのないものでございます。

戦争は、いけません。いけません。いけません！戦後五十年、つらい悲しい思い出、心のむなしさは、早く捨てたと念じながら、ついに消し去ることはできなかったのです。

終戦の翌日、光特攻基地から、兄の後輩高橋さんが遺品を持って兄の出撃と戦死を知らせに来て下さったこと、出撃時の潜水艦長時岡さんが、終戦直後の食糧難、交通難にもかかわらず、病をおしてリュックを背負い、山口県からはるばる墓参に来て下さったことなど、このような思い出も走馬灯のように去来してつきないのでございます。

戦後五十年、兄のことでいろいろな取材がございます。中には、興味本位なことばや態度、こちらの真意が伝わらないことのあるのが残念でございます。

いまの日本は、平和だとばかり喜んではいられないと存じます。日本を含め、世界中にはまだまだいまわしい事件やできごとがいろいろございます。兄のことを回想し、戦後五十年を回想しながら、最後に、真の世界平和を心をこめて祈念する私でございます。

藤岡町 戦後50年に想う会編

「戦後50年に想う」(平成8年3月18日発行)より

(提供 西中山町 元藤岡町議 中村忍さん)